

第2章 京都大学病院構内A J 10区の発掘調査Ⅱ

千葉 豊 長尾 玲

1 調査の概要

本調査区は、病院西構内（薬学構内）の北西部、鴨川の東方約100mに位置しており、聖護院川原町遺跡に含まれる（図版1－521地点、図1）。この地に、京都大学（南部）総合研究棟（環境・生存・共生イノベーション拠点棟）の新営が計画された。この場所は、江戸時代には吉田村の南西端にあっており、発掘調査が実施されたことはなかったため、周辺地区の立合調査の成果などを勘案して、新営予定地における遺物包含層・遺構の有無や深さを確認する必要があると判断し、2024年5月30・31日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、近世の遺物包含層が良好に残存していることが明らかになった。病院西構内の西端、鴨川至近のこの一帯が近世以降、どのように開発されていったのか土地利用の歴史を明らかにすることを課題として、本調査を実施することにした。調査期間は2024年11月18日～2025年2月4日、調査面積は690㎡である。調査結果については、『京都大学構内遺跡調査研究年報 2024年度』で報告したが〔千葉・長尾2024〕、短期間でまとめたため詳述することができなかった。ここで改めて報告することにした。

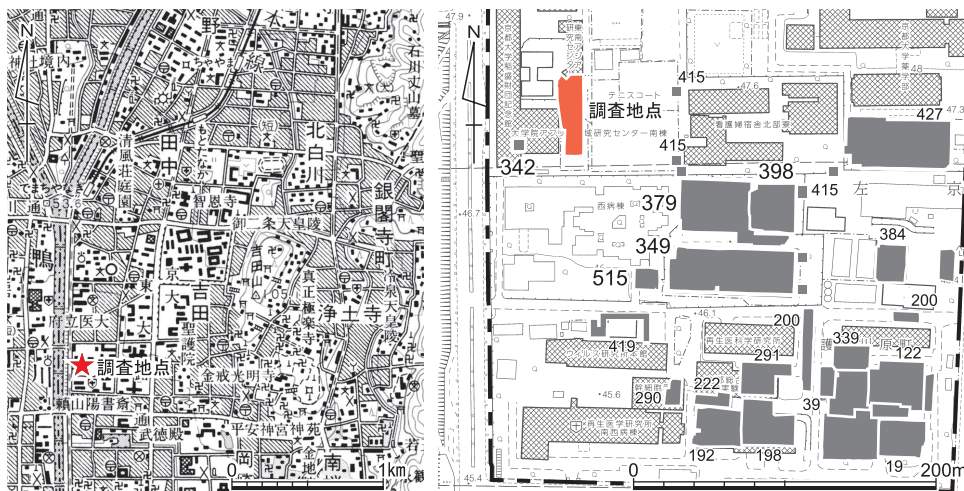


図1 調査地点の位置 縮尺：左1/5万，右1/5000

2 層 位

調査地の現標高は、48.3mでほぼ平坦である。調査区東壁の層序を示して説明する（図2）。第1層は大学の整地土で、0.5～0.8mの厚さをもつ。第2層としたのは、京都織物株式会社が煉瓦基礎を構築した際の掘形である。第3層は京都織物株式会社建設時の造成土で、瓦や煉瓦を含んでいる。0.7～1.4m前後の厚みをもつ。第4層は厚さ10cm前後の黄褐色シルトないしは砂、第5層は厚さ20～30cmの黄褐色砂礫である。いずれも幕末に発生した鴨川の氾濫による堆積物と判断した。第1層から第5層までは機械掘削の対象としたが、その過程で京都織物株式会社の煉瓦基礎が検出されたので、その部分に関しては除去せずに調査の対象とした。

第6層と第7層は江戸時代の耕作土である。明るみの強い上部の第6層（灰黄褐色土）と黒みの強い下部の第7層（黒褐色砂質土）に分離できる。第8層の黄褐色土はこの地が鴨川の氾濫原から離水し安定化し始めたことを示す堆積物である。南東に約70mに位置する379地点の調査では、この層に対比できる地層およびこれを埋土とする遺構から、17世紀台の遺物が多数出土しているが〔千葉・長尾2014〕、今回は遺物の出土はほとんどなかった。第9層は高野川系流路による砂礫層である。この地一帯の基盤層であり、この下部には人の活動痕跡はないと判断しこの面で発掘を終了した。

3 近世の遺構

本調査区内では明白に中世以前にさかのぼる遺構は検出されていない。そこで、近世と近代の2つの時期に遺構の時期をわけて記述する。

近世の遺構は別遺構の上面検出のものを除き、いずれも砂礫上面検出である（図3）。

集石S X 1 調査区の南端で検出した方形に近い落ち込みで、掘削すると礫がやや集中していた。遺物はわずかししか見られず中世末ころの土師器片などを含み、明確な近世の遺物は含まない。中世末か近世はじめころに自然によるくぼみに石を投げ捨てたような遺構かもしれない。

井戸SE 1 調査区北東隅で検出された、径10数cmほどの切石や自然石からなる石組井戸である。埋土は灰褐色土よりもやや淡い色調を呈し、埋土上部では幕末の磁器染付が出土した。検出面の標高は46.2mで、埋土上面で灰褐色土を埋土とするピット複数を検出した。石組検出面の標高は46.0mで、深いところではその下に80cmほど石組が続く。

層 位

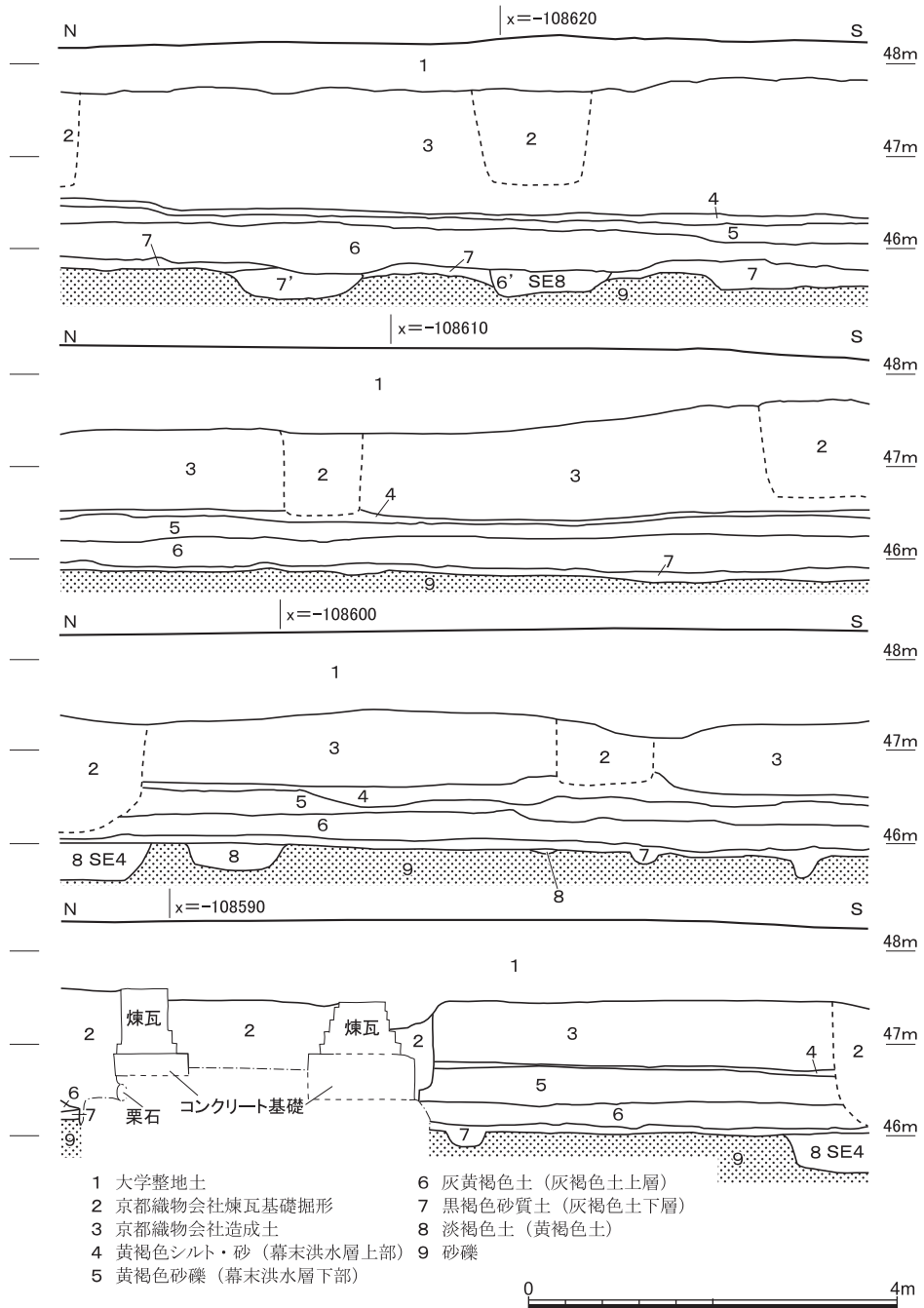


図2 調査区東壁の層位 縮尺1/80

石組内では内湾口縁となる磁器染付（図8－I 2）が出土している。底の標高は44.9mである。木杵や木桶は検出できなかったが、底近くで釘状の鉄製品が付着した木片が見つかっており、もともとは木杵があった可能性もある。

井戸SE3 調査区中央東辺で検出された、径10～15cm程度の礫からなる石組井戸である。検出面の標高は石組の検出面とほぼ同じで46.0mであり、検出面から下に50～60cmほど石組が続く。埋土からは磁器染付椀（図8－I 3）が出土している。木杵や木桶は検出できなかった。底の標高は44.9mである。

井戸SE5 調査区中央の西壁ぎわで検出された石組の井戸で、組んでいる石組はわずかに北東部に一段ほど残っているのみである。検出面の標高は45.9mで、その輪郭はやや不定形である。埋土は黄褐色土や褐色土、灰褐色土などが混在する。最上部で17世紀後半から18世紀初めころの完形土師器皿（図8－I 4）が出土した。また上部で磁器染付や陶器が出土したほか、埋土下部にいたるまで整理箱1箱分以上の平瓦・丸瓦などが出土した。棧瓦をまったく含まないことから、18世紀半ば以前に廃絶した遺構である可能性がある。石組検出面の標高は45.5mで、検出面からは底に向かって直に深くなる。

野壺SE2 調査区北東隅で検出された、井戸SE1と対になる野壺と考えられる円形落ち込みである。検出面の標高は46.2m、底の標高は45.7mで底部は平らである。埋土は淡褐色土であり、磁器染付や陶器すり鉢の破片が出土した。

野壺SE4 調査区中央東壁ぎわで検出された、野壺と考えられる円形落ち込みである。検出面の標高は45.9m、底の標高45.5mで底部は平らである。埋土は淡褐色土であり、磁器染付の小片が出土した。

野壺SE8 調査区南辺東壁で検出した野壺と思われる円形落ち込みで、半分は調査区外へと続いている。検出面の標高は45.8m、底の標高は45.5mである。東壁の層位図（図2）にあるように埋土は、灰褐色土上層の灰黄褐色土である。土師器の小片が出土した。

以上の円形落ち込みのほかにもこれよりややサイズの小さな円形落ち込みが調査区各所にあり、淡褐色土を埋土とするものも多い。いずれの円形落ち込みも外側に木桶を検出できなかったが、漆喰で囲まれたものが皆無であることから考えると、本来は木製の桶を設置した野壺であった可能性が高いと思われる。出土遺物から考えても幕末よりは古い18世紀ころの遺構であろう。

円形土坑SE6 調査区中央の近代煉瓦柱基礎ぎわで検出された土坑で、検出面の標高は45.9m、底の標高は44.9mである。埋土は暗褐色で17世紀後半ころの土師器片を含む。

近世の遺構

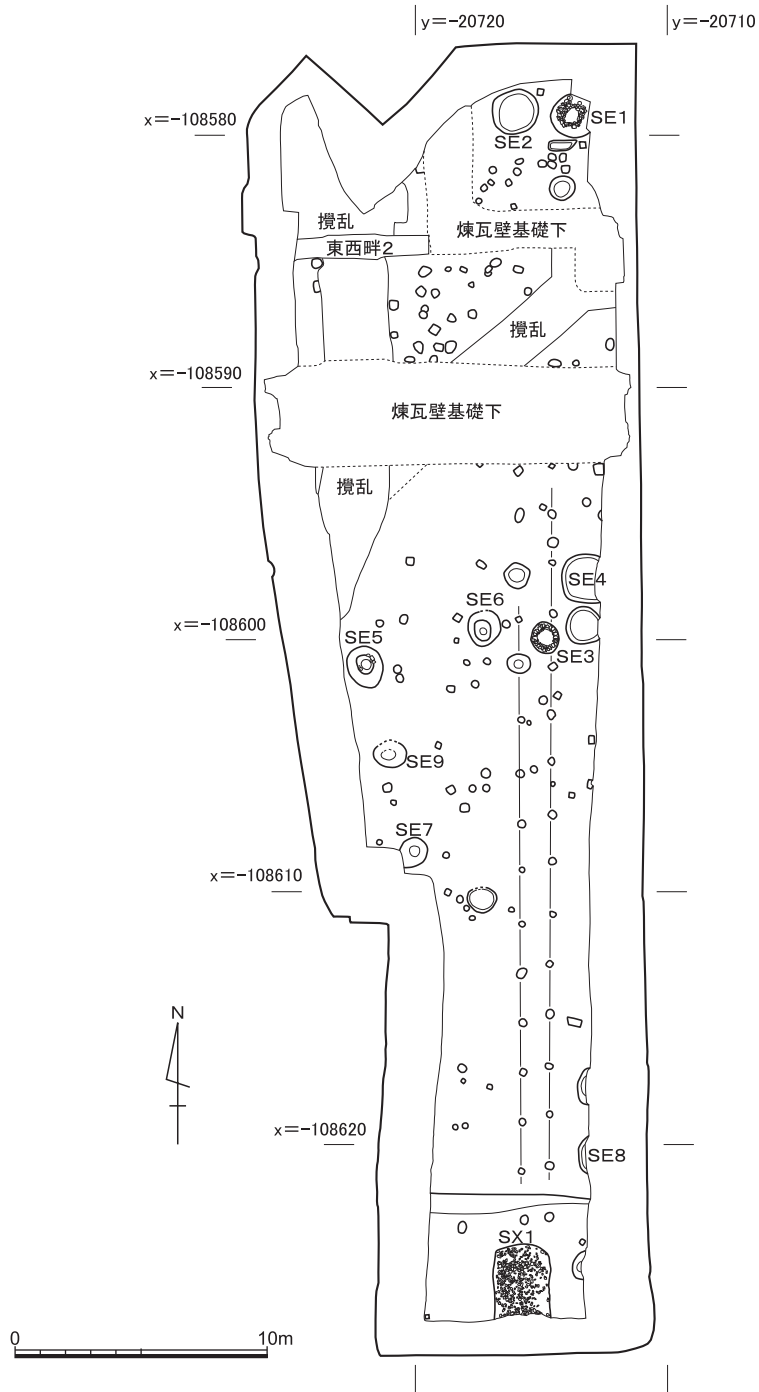


図3 近世の遺構 縮尺1/300

上面で灰褐色土を埋土とするピットを二つ検出したので、それより古い遺構である。

円形土坑 S E 7 調査区南西の近代流路 S R 1 の下で検出された土坑で、検出面の標高は45.8m、底の標高は44.9mである。埋土は暗褐色から黒褐色で、近世陶器片を含む。

円形土坑 S E 9 調査区中央西辺の S R 1 南畔の下で検出された土坑で、検出面の標高は45.8m、底の標高は44.6mである。埋土は暗褐色から黒褐色で、磁器染付や唐津系の陶器や素焼きの陶器すり鉢などを含む。

以上の S E 6 ・ S E 7 ・ S E 9 は、埋土に石組井戸に用いられるのと同様な礫を多く含む。石組は残存していないものの、礫のサイズや底の標高、遺構の輪郭やサイズは、井戸に近い。このことから、もともと石組井戸であったものが破壊しその後、埋没した可能性が高いと思われる。これらの遺構も18世紀ころのものであろう。

ピット 調査区内各所には方形や円形のピットが散在する。これらの多くは耕作にともなうものと考えられる。東西方向にならびそうなものもあるが、定かではない。埋土の色調は灰褐色土のものと淡褐色土に近いものがある。灰褐色土のピットは井戸や野壺、円形土坑の上からも検出されていることから、比較的新しい遺構を含むと思われる。これらとは別に約2mごとにほぼ真南北に並ぶ灰褐色土埋土のピット群が約1.2mの幅をあけて二列確認される。これらのピット群の性質は明らかでないが、過去の調査において病院西構内での真南北のピットの並びや溝が比較的新しい時期のものであることを考えると、幕末の練兵場や明治前期の牧畜場に関係するものかもしれない。なお、本調査区内では他の調査区では検出された耕作にともなう溝の遺構は検出されていない。

4 近代の遺構

近代の遺構は煉瓦基礎をとまなう京都織物株式会社の遺構とそれ以前につくられた遺構に大別される。そこで、ここでは時期を2つにわけて記述する。

(1) 京都織物株式会社以前の遺構（図版3-4、図4・5）

コンクリート路面 調査区北半を北東から南西に走る幅約1.4mのコンクリート路面で、灰褐色土を掘りくぼめて砂礫上面につくられている。コンクリートは砂利をセメントや砂で固めて作られており、路面中央が盛り上がりその両端には側溝が設けられている。東西の煉瓦基礎北東では、南のほうのみ残存しその南端は煉瓦基礎によって破壊されていた。重機による表土掘削のさいに北東部の路面は一緒に除去した。東西煉瓦基礎南西では、流路 S R 1 が上を流れていて砂やシルトが堆積していたことから、S R 1 の構築前かそれ

近代の遺構

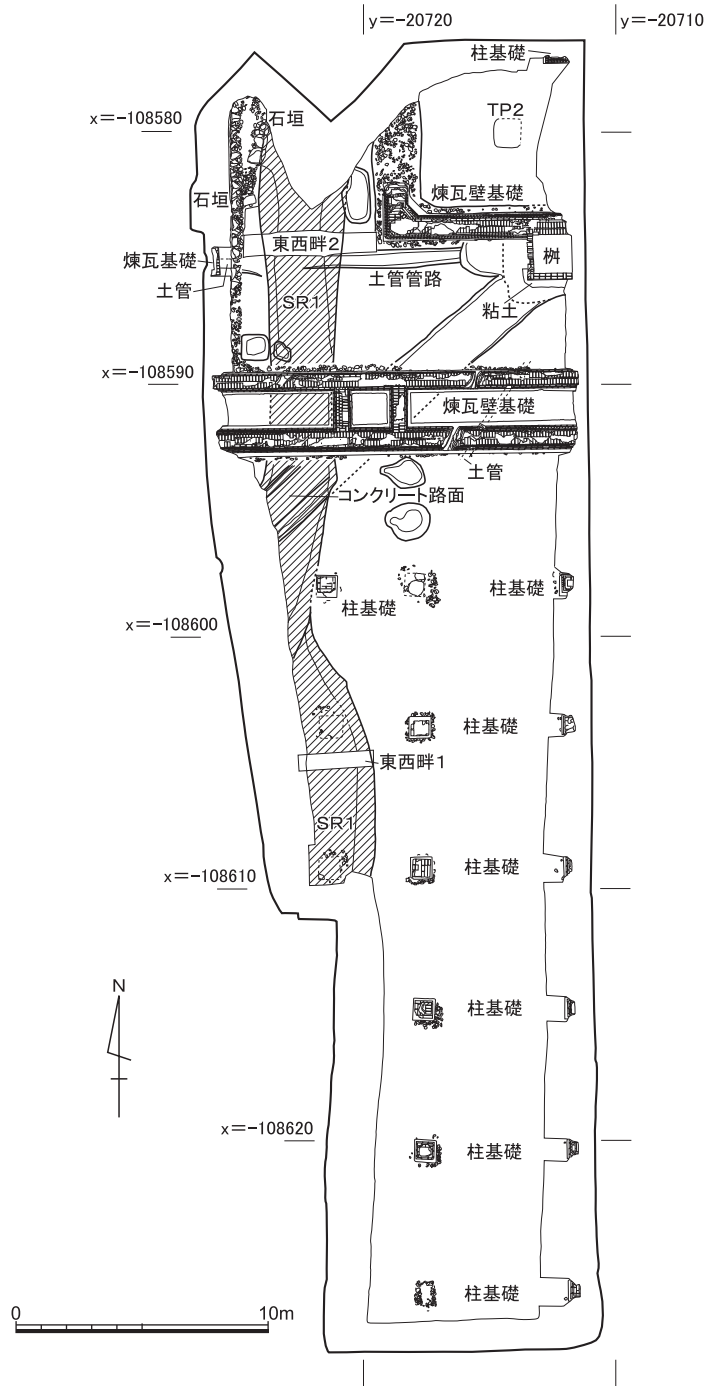


図4 近代の遺構 縮尺1/300

と同時に道路は廃絶したと考えられる。牧畜場時代のものであろうか。

近代流路SR1 調査区西辺を南北に流れる東西幅3m前後の流路である。検出面の標高は北端で46.4m、南端で46.3mであり、表土除去後に白色の砂のラインを検出した。底の標高は東西畔1で45.8mである。埋土は主に3層に分かれる(図5)。上部は灰色シルトで、灰褐色土より上の幕末洪水層上面で検出したが、大半は洪水層とともに重機で除去したので畔の層位図にはわずかししか記載されていない。中部は黄白色砂で、白川砂を主体としたラミナの方向が異なる堆積が見られる。埋土中には幕末から明治期の遺物を多く含む。最下部は全体に灰色シルトが薄く堆積し、その中には幕末期の遺物が多い。中部・下部は川が流れていたときの堆積であると考えられるが、上部のシルトは上流で川の流れをせき止めた後のよどんだ堆積であろう。調査区北端の西肩では花崗岩製の石垣が2段積みまれているが、南には続かず途中で途切れる。また、調査期間後の立合調査ではこの流路の東肩は調査区外の南側で大きく西に曲がるのがわかった。

この流路のつくられた年代は今のところはっきりしないが、1892(明治25)年ころの仮製二万分の一地形図にははっきり描かれていることからそれ以前であり、また北東から南西にのびるコンクリート路面が廃絶した後であることを考えると、明治時代前中期ころと考えるのが妥当であろう。廃絶の時期もまた確かでないが、1912(大正元)年の二万分の一正式地形図には描かれていて1922(大正11)年の縮尺三千分の一の京都計画基本図では京都織物会社の建物が西にのびて川が消えていることから、大正時代中期以前には廃絶しているものと考えられる。なお、1892年ころの仮製二万分の一地形図を見ると、SR1は上流で白川道にそって北東にのび、本部構内AT21区の発掘調査で検出された近代水路SD1・SD8〔千葉・阪口2006 p.88〕とつながることがわかる。

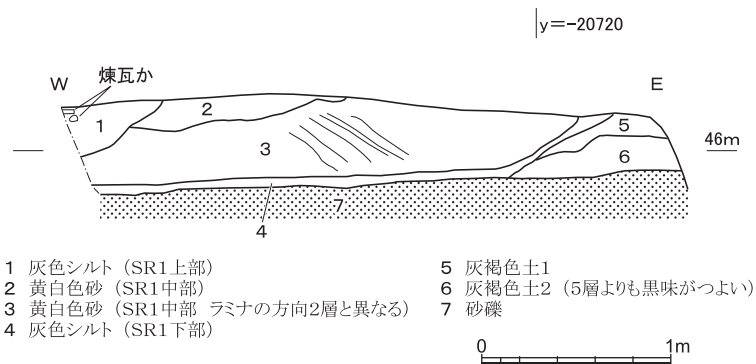


図5 SR1東西畔1南面の層位 縮尺1/40

SR1 西側石垣 SR1 西肩の石垣よりも西にある、面を西側にむけてほぼ真南北に並ぶ石垣である。石垣の裏込めから近代の遺物が出土する。調査区西壁ぎわぎりぎりであり、この遺構の性格はさだかではないが、石垣の面を隠すすぐ西の位置に煉瓦基礎があること、創業時から存在する調査区外の旧京都織物株式会社本館の建つレベルよりもかなり低いことから、京都織物会社建設以前の近代の石垣遺構であると考ええる。

(2) 京都織物株式会社の遺構（図版4・5、図4・6・7）

この調査区内の建物がいつ建設されたかが明確にわかる文献はいまだ見つかっていない。さしあたり参考になるのは、『京都織物株式会社全史』〔千代間編著1969〕の23ページ、一番下にある「開業式当日（明治23年4月27日：筆者注）の本社工場」と題した写真である（図6）。この写真はどの方角から撮影されたか明記されていないが、3連と8連の鋸屋根及び煉瓦壁をもつ工場2棟とともに左端に2階建ての煉瓦建物が写っている。鋸屋根工場では三角屋根の短辺は一般に北向きであること、また写真で陰となっている建物の壁が手前左であることから、この写真は北西から撮影したものといえる。一方で、戦後まもない1946年10月2日に撮影された航空写真（国土地理院の地図・空中写真閲覧サービスで公開）では、2階建ての南北建物の南に立地する鋸屋根工場が創業時よりも西に拡張しており、本調査区全体がこの部分にあたることが判明する。したがって、本調査区内の建物基礎は、京都織物会社新工場の完成した1889（明治22）年6月11日より後に、西に拡張された建物の基礎と考えられる。古い地図では建物の配置が不正確であり、公表されている地図からはいつから本調査区の工場建物が存在したか明確にはわからないが、1922（大正11）年の縮尺三千分の一の京都計画基本図ではかなり正確に建物が描かれており、これ以前に建設されたことは間違いない。以下煉瓦基礎を中心に遺構について記述する。

南側煉瓦壁基礎南部（図7） 平面図とともに南面の立面図を図示した東西にのびる煉

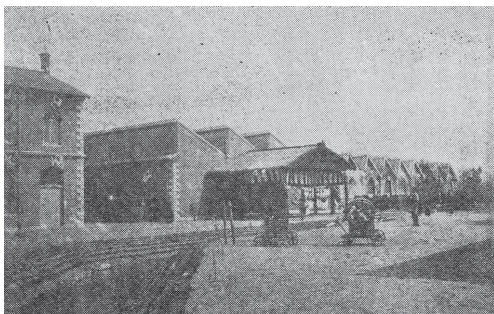


図6 京都織物株式会社〔千代間編1969〕

瓦基礎で、これは約8連で一棟をなす鋸屋根工場北壁の煉瓦基礎である。この基礎は流路SR1が廃絶した後に、造成土や幕末洪水層を掘りくぼめてその上に構築されたものである。最下部に20～30cmほどの厚さで栗石とともに暗褐色の土をこめてその上面を土で平らにならし、その上にコンクリート基礎を構築し、さ

らにその上に煉瓦基礎を段々に積み上げたものである。栗石は土によってそれほど強く叩きしめられてはいない。コンクリート基礎は碎石をセメントや砂でかためて作られていて、煉瓦基礎の煉瓦最下段より広い幅をもつ。内部に鉄筋はない。コンクリート基礎の幅は南北1.2～1.3m、厚さは40～50cmくらいである。その上の煉瓦基礎最下段は南北90cm弱あり、1つの段は2層の煉瓦で構築されている。下の煉瓦は短い面（小口）を外向きに、上の煉瓦は長い面（長手）を外向きにするようにして煉瓦を2層積み上げてその間をモルタルで固めている。いわゆるイギリス積みの積み上げ方である。煉瓦基礎の各段はこれと同様な構造で、下から2段目、3段目、4段目、5段目と段が上がるごとに南北幅は短くなり下から5段目では南北幅50cmくらいになる。各段の境目には煉瓦接着剤のモルタルがやや多めに塗られ外側にはみ出ている部分も多い。東壁際では5段目の上側の層の煉瓦は残っていないが、西壁近くでは残っている部分もあり、その最も高い検出面の標高は47.5mである。京都大学施設部には、発行年は不明であるものの、工事期限を1968（昭和43）年8月31日限りとする『京都大学旧京都織物建物解体仕様書』という文書が残っており、そこに記載されている図面によるとこの煉瓦基礎の東続きの部分に「t=450（レンガ）」と書かれている。基礎上の工場煉瓦壁は450mmすなわち45cmであったと考えられ、この最上段50cmよりやや狭い。同文書では本調査区よりやや東の続き部分の建物断面図も記載されており、これに従えば煉瓦壁の高さはFLすなわち床（floor）から5mあり、さらにその上に2m上がったところから斜めに屋根が下がり、屋根の上は「日本瓦葺」と記されている。これらを支えるためにはかなりしっかりとした基礎が必要であることから2層で1組の段となる5段の煉瓦基礎を構築したのであろう。

煉瓦壁の基礎については、昭和15年発行の煉瓦建築の著書に根積（フーチング）について次のような説明がある。

「壁厚より基礎コンクリート巾が大きい事は云ふ迄もない。（中略）之が鉄筋コンクリート造なれば必要な鉄筋を挿入して基礎の折れることを防ぐが無筋の場合に於ては煉瓦積の原理として上部より来る荷重を平均に分布させる必要が生じる。之が為に煉瓦壁の下部は次第に広げて基礎コンクリートの巾全体の力を伝える構造方を根積と称へる根積は通常二五分づつ二段重ねて第7図に示すように段形に積出し壁下の面積を広くして目的を達せしめる。」〔渡辺・和田1940 p.34〕（原文は旧字体であるが新字体に改めた。引用部分については以下同様。）

南側南部の基礎もおおむねこの記述に近い構造をとることで、無鉄筋の基礎コンクリー

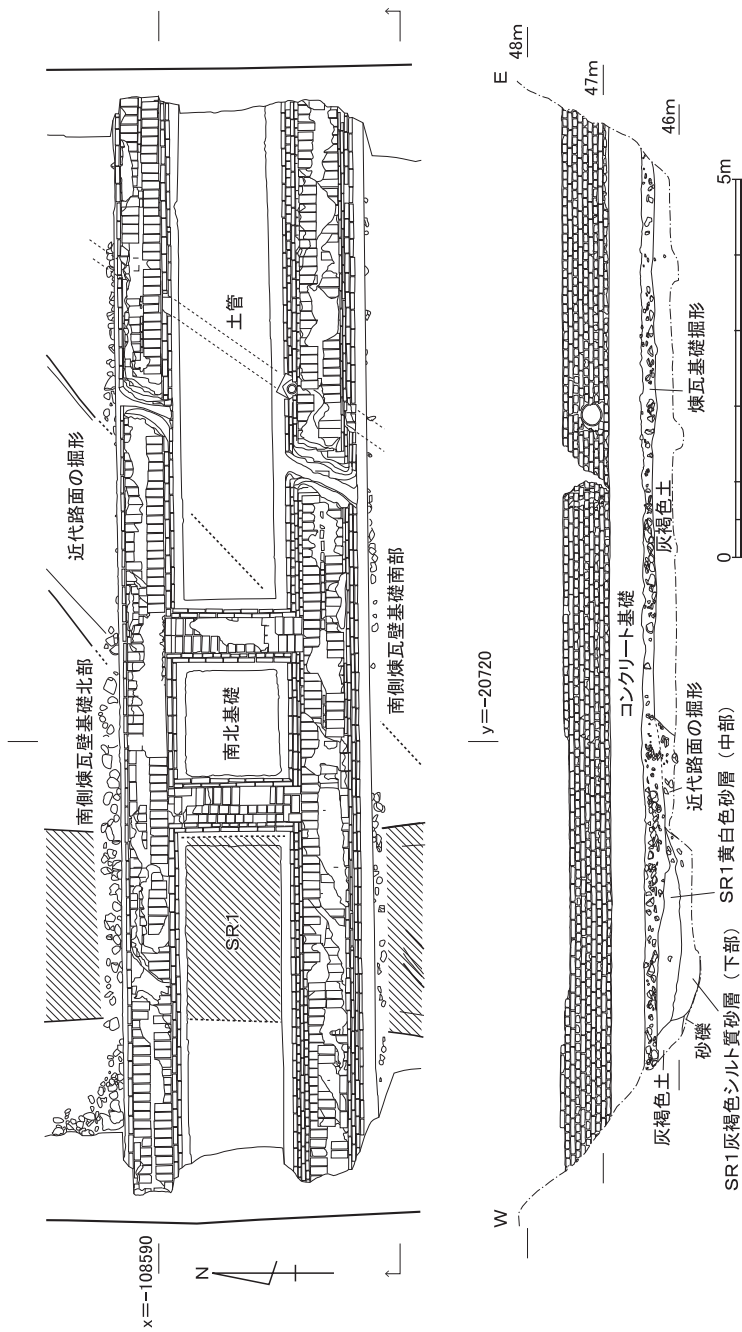


図7 南側煉瓦基礎平面拡大図(上)と南面立面図(下) 縮尺1/100

トの破壊を防いでいるものと考えられる。また上記引用部の第7図によれば、基礎コンクリートの下角と、その対角線上にある煉瓦壁の一番下角部分を線で結んで、この線と煉瓦壁の下ラインが45度をなすべきことが図示されている。調査区東壁の断面図を見ると、その煉瓦基礎最上部より少し上に煉瓦壁の基礎がくるところからすると、コンクリート基礎幅は昭和前期ころの建築学上のあるべき幅よりはやや狭いことがわかる。

南側煉瓦壁基礎北部 平面拡大図のみで立面図は示していない東西にのびる煉瓦基礎で、途中でコンクリート基礎をとまう南北方向の煉瓦基礎2本を通じて南側煉瓦壁基礎南部とつながる。これらは一連のもので、南側煉瓦基礎とほぼ同時に作られたものであろう。この部分も土をつめた栗石の上に構築され、その上にコンクリート基礎が構築されている。その南北幅は約80cmでコンクリートの厚さは約25cmと、南部の東西煉瓦基礎よりかなり小ぶりである。その上の煉瓦基礎の段も南部のものより少ない。北面では北に飛び出た部分は1段しかなく、南面では2段ある。煉瓦基礎の一番下の幅は約65cm、下から2段目は60cm弱で、最上部は50cmである。根積の方法はとられているが、前述した建築学上のあるべき幅と比べてコンクリート基礎の幅はかなり狭い。北面から見ると一番下の煉瓦は小口を外向きに、その上の煉瓦は長手を外向きにし、その上面が段差となっているが、1つ上の煉瓦は長手を外向きにしている。その上は小口を外向きにした層が二つ続き、その後長手と小口を外向きにする層が交互に外側に現れる。また煉瓦基礎の中心はこのコンクリート基礎の北よりに偏っている。前述した『京都大学旧京都織物解体仕様書』によると、この基礎の上の煉瓦壁も45cm幅であったようであるが、その上の建物については判然としない。いずれにせよ鋸屋根工場1棟の北端の壁ほど規模の大きくない構造物の基礎であろう。最も高い検出面の標高は47.6mである。

南側煉瓦壁の南北基礎 東西の煉瓦基礎の北部と南部をつなぐ南北方向の基礎で2本ある。両者ともコンクリート基礎幅1m弱で、その上に煉瓦基礎を段々に根積の方法で構築する。煉瓦基礎最下部の幅は約70cmである。煉瓦基礎は少なくとも3段はあるようであり、最上部は約50cmの幅である。前述の『京都大学旧京都織物解体仕様書』の図面を見てもこの部分の上にはとくに煉瓦壁は見当たらないのにこうした基礎を構築した理由は判然としない。ただ、この2本の基礎直下は、灰褐色土を掘りくぼめて構築した近代のコンクリートの路面があった部分であり、そのすぐ西に流路SR1が最近まで流れていたことを考えると、地盤がやや軟弱な部分を補強する目的で2本の南北基礎を作って2本の東西基礎をつないだのかもしれない。

北側煉瓦壁基礎 調査区北東にある煉瓦壁基礎で、これは三連一棟の鋸屋根工場の南西角部分の基礎である。調査区東壁ではその南に煉瓦とモルタルを用いた深い桝がくっついている。栗石のあいだに土をつめた基盤の上にコンクリート基礎を構築し、その幅は約1.1m、東壁ぎわで厚さは約45cmである。その上に煉瓦基礎を5段の段差ができるように根積の方法で積み上げている。煉瓦基礎最上部の幅は約60cm弱である。この構造は南側煉瓦壁基礎南部の工場壁基礎と類似していてイギリス積みであるが、コンクリート基礎上にまず長手が外側に向くように煉瓦を配列し、その上に小口が外側に来るように煉瓦を配列して2層で1つの段を構成する。その後この順に長手が外側に来る層と小口が外側に来る層を互い違いに積み重ねる。このため上から見ると煉瓦基礎段差上で小口が外側に向く煉瓦が多く、上から見て長手が外側にむく煉瓦が多い南側の煉瓦壁基礎と対照的である。この煉瓦基礎と下のコンクリート基礎は南西角外側ではほぼ直角に曲がるが、内側はいったん45度ほど曲がってもう1回45度曲がるようにしている。最も高い検出面の標高は47.6mである。基礎の北にのびる部分は途中で途切れ、栗石のみが残存している。

北西煉瓦基礎 調査区北西で、南北方向の石垣を塞ぐようにつくられた煉瓦基礎である。下から12層煉瓦が積まれその上にモルタルが塗られているが、上部構造の荷重を分散する根積の方法はとられていない。また、調査区内の他の煉瓦基礎と異なり、煉瓦のつなぎ目以外の表面にモルタルが付着しておらずきれいである。この部分の上に何があったか定かではないが、煉瓦基礎内部の北よりに土管が通り、東端で外部に排出するようになっている。これらのことから、この基礎は作られた当初完全に土に埋まっておらず、まだSR1が機能していたところに東面が露出していたより古い基礎である可能性がある。

桝 調査区東壁際の北側煉瓦基礎の南で検出した、平面で1辺1.5mの正方形をなす深い桝で、多くの土管が結合している。深いために桝の最下部までは掘削せず、途中まで掘削したのち埋め戻した。桝の北側には建物壁の煉瓦基礎があるが煉瓦基礎のうち桝側には段をもうけず平らな面としてモルタルを塗っている。西側・南側は煉瓦が積み上げられて桝の内側にモルタルが厚さ約1cmほど塗られている。東側は調査区東壁をなしモルタルを塗った面があらわれている。桝の南側煉瓦壁は外側から黄色の粘土で補強されている。この桝の西側には北西煉瓦基礎の下からのびる直径約35cmの土管が結合し、また南側煉瓦基礎内部をくりぬいて北東から南西に斜めにのびる直径約30cmの土管が桝の南東角の標高46.6m付近で結合する。桝の東側には標高46.0m付近に直径約50cmの土管が見え、東にのびる。北側にはさらに深い部分にこれと同じくらいの直径の土管が2本見つかった。また、

南側煉瓦基礎南部では、平面拡大図にも現れる地上に向かって開く土管と煉瓦基礎内を斜方向に貫通する土管が結合している。おそらくこれらの土管は地上の排水を集めて枡の中にためるための土管であり、枡は深いところにある大きな土管で排水するための汚水枡であったのではないかと推測する。

柱基礎 鋸屋根工場の柱を支えるための基礎で、おもに南側煉瓦壁基礎の南で真南北と真東西に一定間隔でならぶ。重機による表土掘削時に除去してしまい、基礎の残骸や栗石しか残っていないものは平面図に破線で示している。調査区東壁内と中央にそれぞれ6基、西辺で3基確認した。また、調査区北東角では北側の工場建物内の柱基礎が1基確認できた。南側の建物柱基礎で検出面の標高がもっとも高いのは東壁内の北から3番目の基礎で、47.4mである。また、北側の建物柱基礎検出面の標高は47.3mである。

これら柱基礎の構造も煉瓦壁基礎の構造と類似している。柱基礎の上部が崩落していたり表土掘削時に重機で除去してしまったりして、全体像が完全にわかる柱基礎は見つかっていないので、いくつかの柱基礎から得たデータからその構造を復原する。まず当時の地表をほりくぼめて、底に暗褐色の土をつめた栗石を敷き、その上に厚さ35cmくらいで1辺85cm前後の正方形のコンクリート基礎を置く。その上に1辺約70cmの正方形になるよう煉瓦を2層1組になるように最下段をならべ、モルタルでつなげて上面に薄くモルタルを塗る。煉瓦基礎の正方形はコンクリート基礎の正方形とくらべて位置がやや斜めに歪んでいるものもある。さらに上に1辺約60cmになる2層1組の段を作り、同様にモルタルでつなげて上に薄く塗る。その上にさらに1辺50cmの正方形になるように煉瓦を積み上げ同様にする。この最上段は残りのよい部分では少なくとも6層の煉瓦からなる。煉瓦の各層は煉瓦の端が下の煉瓦の端と重ならないように互い違いに積み重ねている。このような独立柱下の基礎について煉瓦建築の著書では「其の一本の柱に来るべき荷重を計算して基礎の巾を決定し以上は根積を設ける事は前の方法と変りはない」〔渡辺・和田1940 p.35〕とされており、煉瓦壁の基礎同様に上からかかる荷重を分散させるために根積が採用されている。前述の『京都大学旧京都織物建物解体仕様書』によれば、この基礎の上には1辺21cmの方柱があったと思われ、煉瓦基礎はこれより広い。1辺21cmの柱は1898（明治31）年に建設された京都綿子株式会社（現京セラ）の鋸屋根工場建物の木製トラス詳細図で図示された柱にも用いられており〔川島2021 p.228〕、工場の鋸屋根を支える柱として実際にこのくらいの柱が用いられていたであろう。

これらの柱基礎の中心間の間隔は南北では一定で約5.6mであるが東西では異なり、調

近代の遺構

査区内西側の基礎中心間の間隔は約3.6m、東側の基礎中心間の間隔は約6mと、西側の基礎間隔のほうがかなり狭い。この点は前述した『京都大学旧京都織物建物解体仕様書』の本調査区にあたる部分の図面では、南北間の柱間隔は実際と同じ5.6mとなっている一方で、東西の柱間隔は一定で5mで描かれている。発掘調査によってこの図は実際とは異なっていたことがわかる。このように南北間隔が一定なのは、鋸屋根工場内で採光量を一定にするため窓間隔を一定にする必要があるからなのに対して、東西は設置する機械の大きさなどさまざまな事情を考慮して柱の位置を変えることが可能であったからであろう。織物工場ではないが、紡績工場の平面計画について岡本鑒太郎は、「柱間は機械の配列の都合でこうなるので、丁度広い間は狭い間の三倍になって居ります」〔岡本1909a p.6〕としているが、柱間隔が機械の配列によって決定するのは、1891（明治24）年の濃尾地震以降の第2期の紡績工場建築の特徴であるという。また、日露戦争後の1907-1908（明治40-41）年の第3期になると、「柱も梁も或は木屋も鉄であって上の合掌が木になって居ります」〔岡本1909b p.4〕とされているように軸組の材質が木から鉄に変わるという。〔川島2021 pp.175-176参照〕本調査区内の煉瓦基礎の上に鉄柱ではなく木製の方柱があったとすれば、工場建築の特徴としては岡本のいう紡績工場の第2期のものと類似する。

以上報告した壁や柱の煉瓦基礎に用いられた煉瓦をすべて詳細に調べたわけではないが、見たかぎりでは刻印は見あたらなかった。また煉瓦の規格に統一性はなく、多少大きさの異なるものをモルタルで固めて用いている。ここまで煉瓦基礎を中心として京都織物株式会社の遺構について見てきたが、建築時あるいはその後の会社操業時の図面や建物の変遷をしめす資料は入手できておらず、不明な部分も多い。今後これらの資料の入手によって遺構の性格がより詳細にわかることを期待したい。

5 出土遺物

江戸時代から近代に至る土器・陶磁器・煉瓦・瓦・ガラス製品など整理箱20箱を数える遺物が出土した。ここでは、近世とSR1に大別して、出土遺物の解説を加える。

(1) 近世の出土遺物（図8～10）

SE1 出土遺物（I1・I2） いずれも石組下部から出土した。I1は京・信楽系の陶器碗、I2は磁器染付碗である。

SE3 出土遺物（I3） 石組内より出土。磁器染付の所謂、くらわんか碗である。

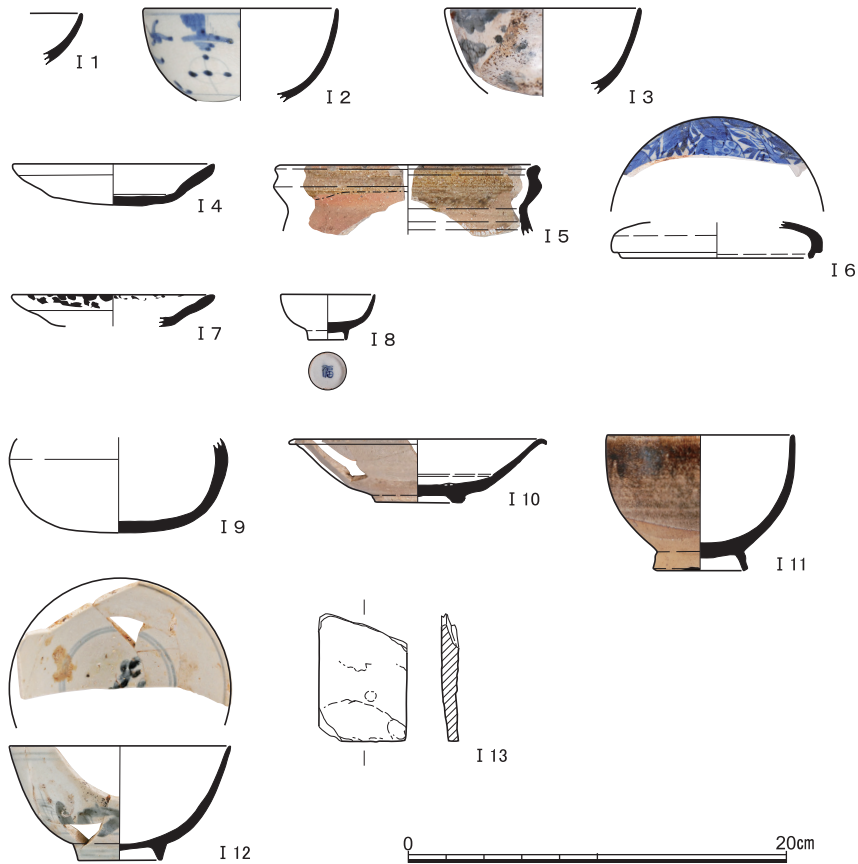


図8 SE 1出土遺物（I 1 陶器，I 2 磁器），SE 3出土遺物（I 3 磁器），SE 5出土遺物（I 4 土師器，I 5 陶器，I 6 磁器），SE 6出土遺物（I 7 土師器，I 8 磁器），SE 9出土遺物（I 9 土師器，I 10・I 11 陶器，I 12 磁器，I 13 石製品）

SE 5出土遺物（I 4～I 6） I 4は土師器皿。完形の皿で口径10.5cm。内面の底部と体部の境が撫で調整により強く凹む。I 5は陶器鉢。口縁部の内外面のみに灰釉を施している。I 6は磁器染付の蓋である。

SE 6出土遺物（I 7・I 8） I 7は土師器皿。I 4と同様に内面の底部と体部の境が撫で調整により強く凹んでいる。口縁端部には煤が付着する。I 8は磁器の小盃。底裏に「福」の銘をもつ。

SE 9出土遺物（I 9～I 13） I 9は土師器の底部。丸底で，内外面とも丁寧な撫で仕上げ。I 10は口縁端部が端反りとなる陶器皿。高台と見込みを除いて灰釉を施している。見込みには目跡が残る。I 11は陶器天目碗。I 12は磁器染付の碗。I 13は砥石。

出土遺物

灰褐色土出土遺物（I 14～I 64） I 14～I 18は土師器皿。いずれも見込みに凹線をもつ。調整にともなう凹みというより、装飾としての圈線へと変化している。I 19・I 20は土師器焙烙。I 21は土師器の乗燭。灯芯をさす中央の穴の周囲に煤が付着している。I 22は土師器ツボツボ。

I 23～I 27は陶器灯明受皿。I 26・I 27は外面に煤が付着する。I 28～I 30は陶器灯明皿。I 28は見込みに目跡を残し、口縁端部外面に煤が付着する。I 30は滑り止めの条線

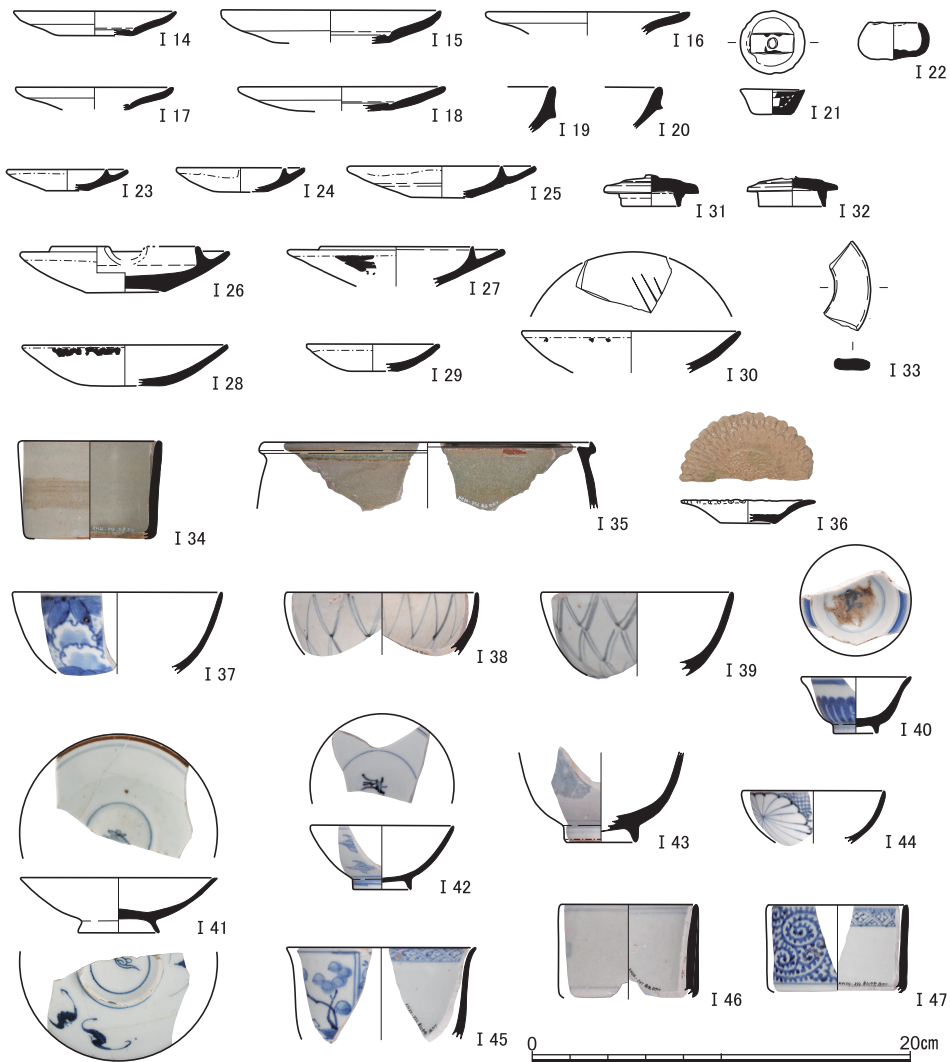


図9 灰褐色土出土遺物(1)(I 14～I 22土師器, I 23～35陶器, I 36軟質施釉陶器, I 37～I 47磁器)

を見込みに施している。I 31・I 32は陶器蓋。I 33は陶器焼成時に使用される輪トチン。
I 34は陶器の筒型椀。I 35は陶器鍋。受け部を除いて内外に灰釉を施釉する。I 36は軟質
施釉陶器の皿。型をもちいて内面に菊花の意匠を描いている。

I 37～I 47は磁器染付の椀や盃の類。I 38は内外面，I 39は外面に，二重網目文を施
している。I 40は口縁部が端反りとなる小盃。I 46・I 47は筒型椀。I 47は外面に蛸
唐草文，口縁部内面に四方禪文をもつ。

I 48～I 64は「面打」と呼ばれる円盤状の泥メンコ。多くは直径3 cm前後であるが，
I 64は5 cm前後となる大型の泥メンコで，「永」楽「通」寶の銭をかたどっている。

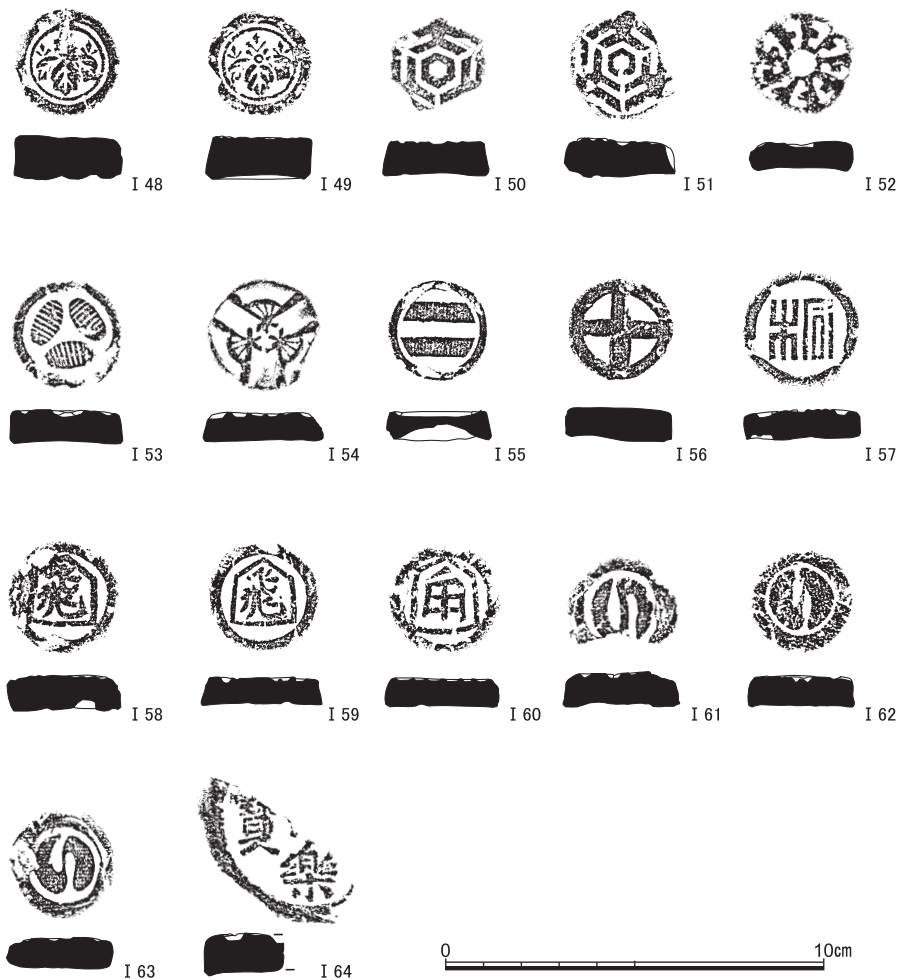


図10 灰褐色土出土遺物(2) (I 48～I 64泥メンコ)

(2) S R 1 出土遺物 (図11 ~ 16)

I 65は土師器高杯の脚部から底部にかけての部位。脚部は面取りしているが、摩滅している。中世の遺物の混入である。I 66とI 67は焼締陶器の急須。接合しないが、同一個体の可能性もある。内面に指押さえの跡が顕著に残る。釘彫りによる文字があり、I 67の把手の脇には「蓮月」の銘をもつ。自詠の和歌を茶器に記した蓮月焼である〔千葉2006〕。I 68～I 110は陶器。I 68は徳利。白泥を刷毛塗りする。I 69は山水土瓶。I 70は仏飯器。銅緑釉を施す。I 71は灯明受皿。I 72～I 74は御神酒徳利。細首で、胴部がゆるやかに湾曲する。I 72・I 73は瑠璃釉、I 74は黒釉を施している。I 75は鉢。I 76は煎茶碗。鶴文を描く。I 77・I 78は蓋物。I 79は蓋で内面に「セ」と墨書される。I 80は鉢。火熱で

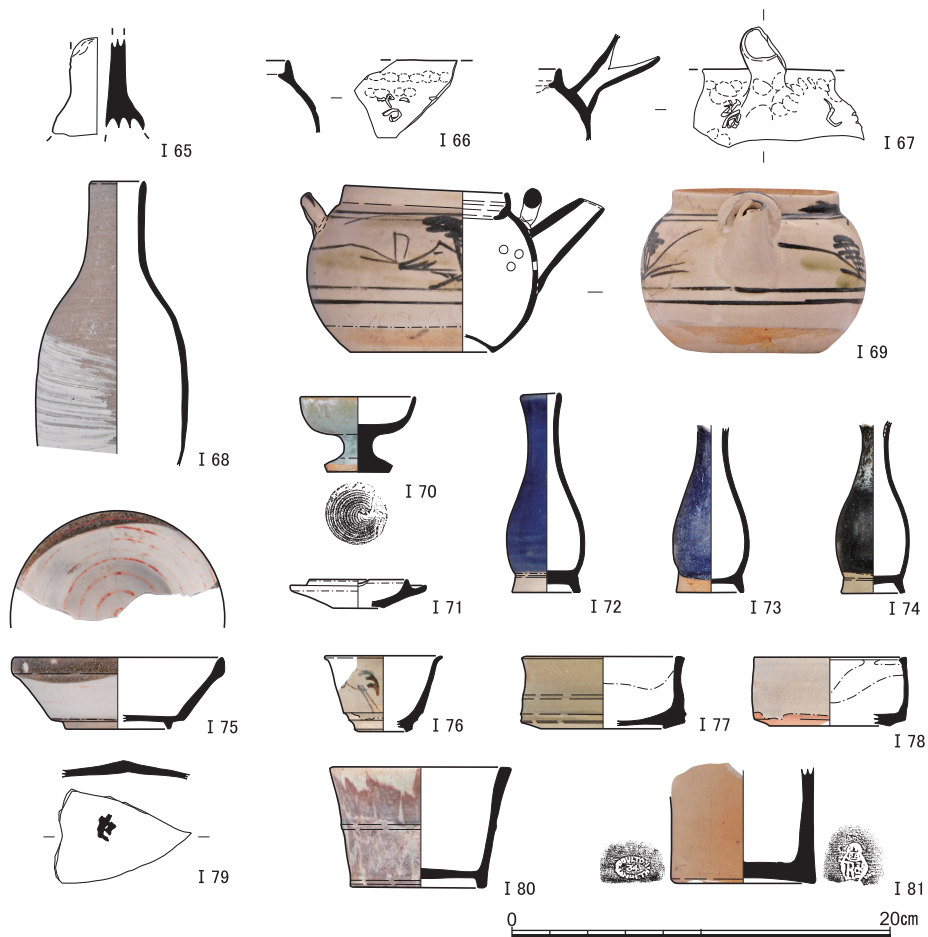


図11 S R 1 出土遺物 (1) (I 65土師器, I 66～I 81陶器)

外面が荒れている。I 81は西洋のボトル型の容器。外面は底裏も含めて全面施釉するが、内面には釉を施さない。底脇の対向する2箇所^ひに刻印がある。そのうち、中央に「34」の数字を入れる刻印（向かって左側の拓本）の上部にある刻印の文字は「DOULTON」と判読できる。英国には1815年創業の「ROYAL DOULTON」という陶磁器メーカーが存在するが、それに関連する製品かどうかは調べがつかなかった。

I 82～I 89は同型品の陶器小椀。外面に白泥を刷毛塗りし、内面は全面を白化粧したあと、見込みに鉄絵で織物制作にもちいる杼（シャフト）をクロスさせた意匠を描いている。同様の意匠をもつ磁器椀が病院構内A I 15区から出土している〔富井・内記2017, 図13—I 99～I 102〕。これは京都織物株式会社の商標として用いられた図案である〔千代間1969 p.33〕。I 90も陶器小椀で、内外面に白泥を刷毛塗りし、胴部に「京都織口（物）會社」と入れている。これも病院構内A I 15区より「京都織物會社」と記された小椀が見つかっており〔富井・内記2017, 図13—I 104〕、同類とみてよい。I 82～I 90は京都織物株式会社で使用するための特注品とみてよい。I 91は内外面に白泥で刷毛塗りを施す陶器小椀で、胎土や意匠、成形技術が上に解説した特注品と酷似するので、同じ窯元の製品と判断できる。

I 92～I 110は陶器の蓋の類である。I 92～I 94・I 104は蓋物の蓋。I 95～I 103,

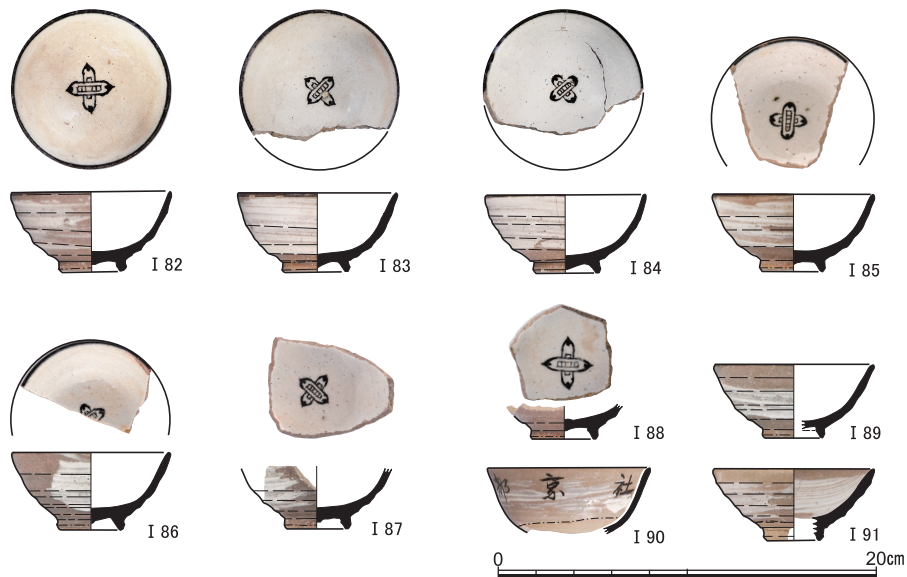


図12 SR 1出土遺物 (2) (I 82～I 91陶器)

出土遺物



図13 SR 1 出土遺物 (3) (I 92 ~ I 110 陶器)

I 105 ～ I 110は土瓶・急須の類の蓋。I 102とI 110は無釉焼締。I 110は型作りで内面に布目痕を残している。I 108とI 109は湯気抜きの小孔をもつ。

I 111 ～ I 141・I 151・I 152は磁器の碗・盃の類。I 111 ～ I 121は、俗に染色体文と呼ばれる意匠をもつ端反りの染付碗。I 115を除いて口銹とする。文様意匠は手描きのもの（I 111 ～ I 115）と型紙摺りのもの（I 116 ～ I 121）がある。いずれもベロ藍と呼ばれる鮮やかな藍色を呈する。I 122 ～ I 124は内外面に靈芝文を描く染付碗。I 129は線描きで意匠を描き、口縁部内面に雷文の縁文様をもつ。I 130は口縁部が内湾気味に立ち上がる碗で、16弁の菊文と桐文を交互に2個配している。I 129とI 130は呉須による染付で、江戸時代後期に位置づけられる。I 132 ～ I 135はベロ藍による鮮やかな藍色の染付碗で、型紙摺りである。口縁部内面に瓔珞文の縁文様をもつ。I 136は鉄釉を外面に刷毛塗りする。底裏に窯元を示す刻印がある。I 137・I 138は外面に青磁釉を施す碗。I 139は、金・赤・緑を用いて上絵付けで雪印文様を描く端反りの碗。底裏に「幹山精製」の銘をもつ。I 140は盃で、金を用いて上絵付けで、見込みに「紀念」、底裏に「八木栄次郎」と書いている。I 141は白磁の小盃。I 150・I 151は筒形碗。I 150は染付、I 151は外面青磁釉を施し、口縁端部を口銹とする。I 152は煎茶碗で、底裏に「道八」の銘をもつ。

I 142 ～ I 149は磁器蓋物。焼成時の溶着を防ぐため、口縁端部は露胎の口禿とする。I 142・I 143は藍と緑を用いた手描き文様で、I 144・I 145は藍と緑を用いた型紙摺り、I 146・I 147は藍による型紙摺り、I 148・I 149は藍による銅版転写で文様を描いている。

I 153は磁器染付の徳利。I 154 ～ I 163は磁器の蓋。I 154・I 161は手描き、I 155・I 160は銅版転写、I 156 ～ I 158は藍と緑の2色、I 159は藍色を使い、型紙摺りで文様を施している。I 162は上絵付けで赤色を用いて網目状文様を手描きで施す。I 163も上絵付けで、銅版転写を用いて赤色で獅子、青色で花を描く。

I 164 ～ I 171は磁器の段重。I 164・I 165は手描き、I 166 ～ I 168は型紙摺り、I 169 ～ I 171は銅版転写で文様を描く。I 172は花卉型の蓋物。文様は銅版転写。

I 173 ～ I 178は磁器皿の類。I 173は口縁部を輪花とし、高台は蛇の目高台である。I 174・I 175は見込みに型紙摺りで文様を描く。I 176は白磁の皿。I 177は紅皿。I 178は四方皿で、角の部分には切り込みを設けている。文様は上絵付けの赤絵である。

I 179は底部破片。見込みに上絵付けで、赤と緑を用いて文様を描いている。底裏に陽刻で表現された刻印があり、「泉」と判読できる。I 180は皿と考えられる洋食器の底部。見込みに花文を描き、底裏には「J A V A」以下不明となる文字が見える。

出土遺物

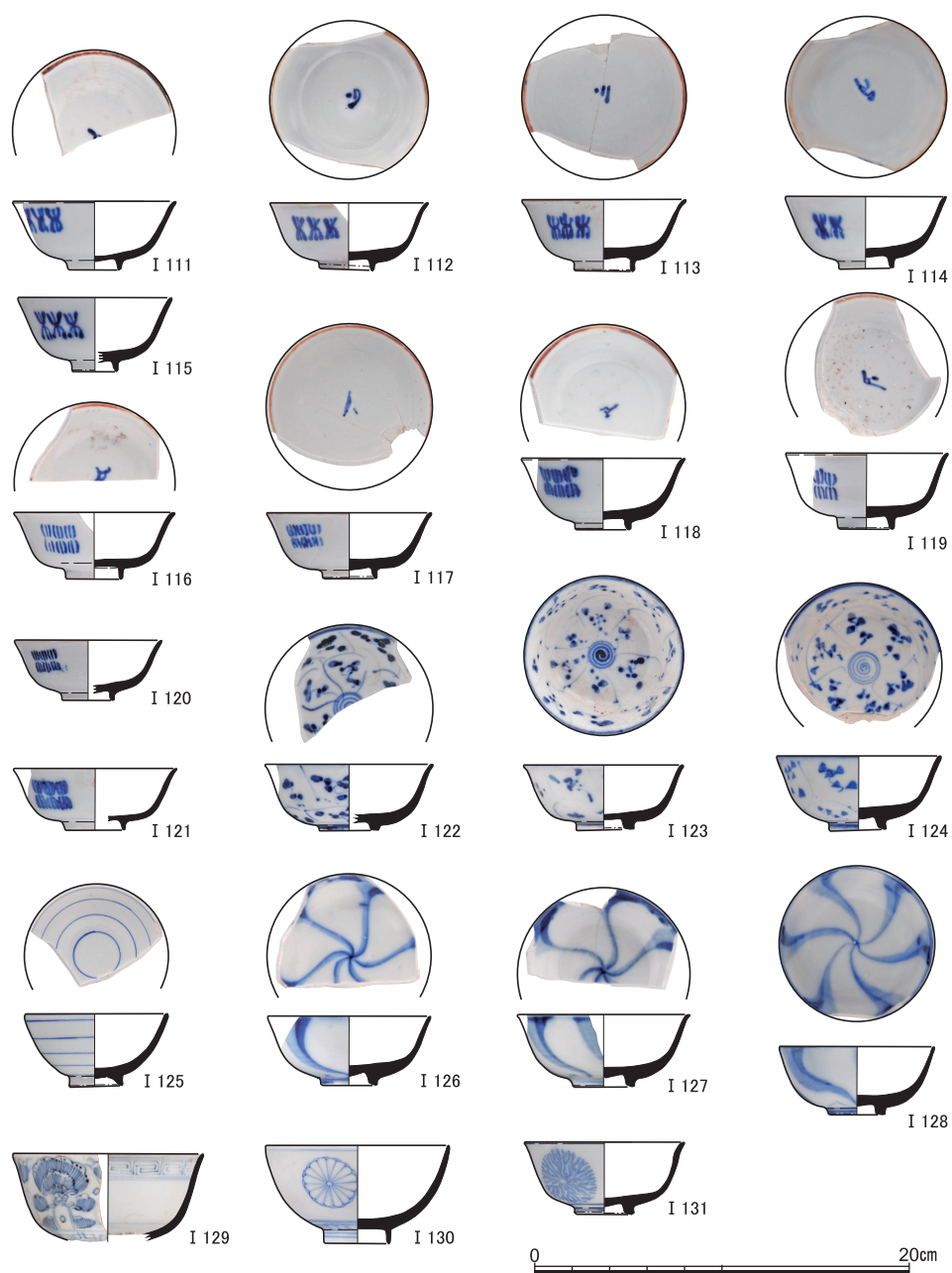


図14 SR 1 出土遺物 (4) (I 111 ~ I 131磁器)

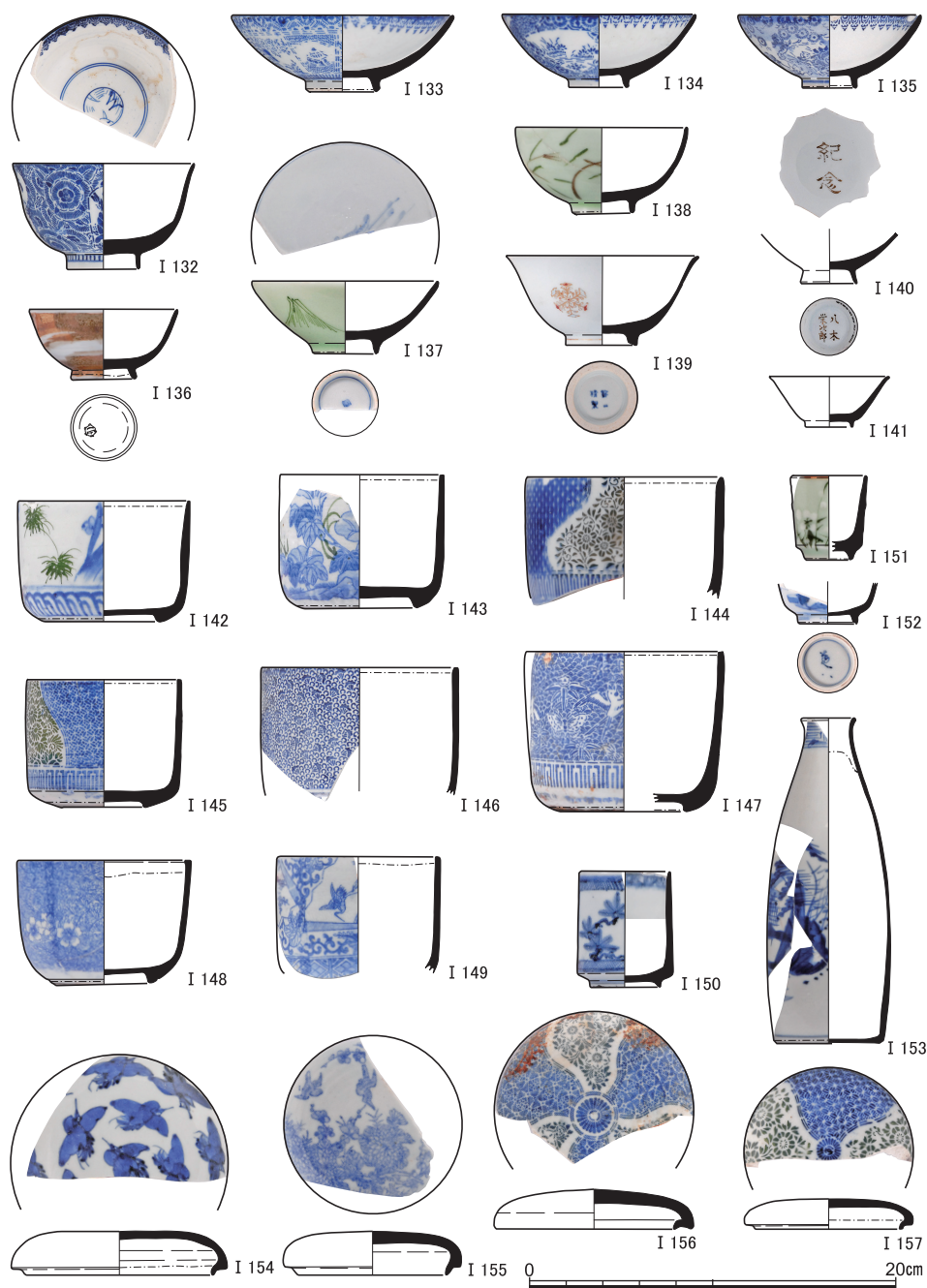


図15 SR 1 出土遺物 (5) (I 132 ~ I 157磁器)

出土遺物

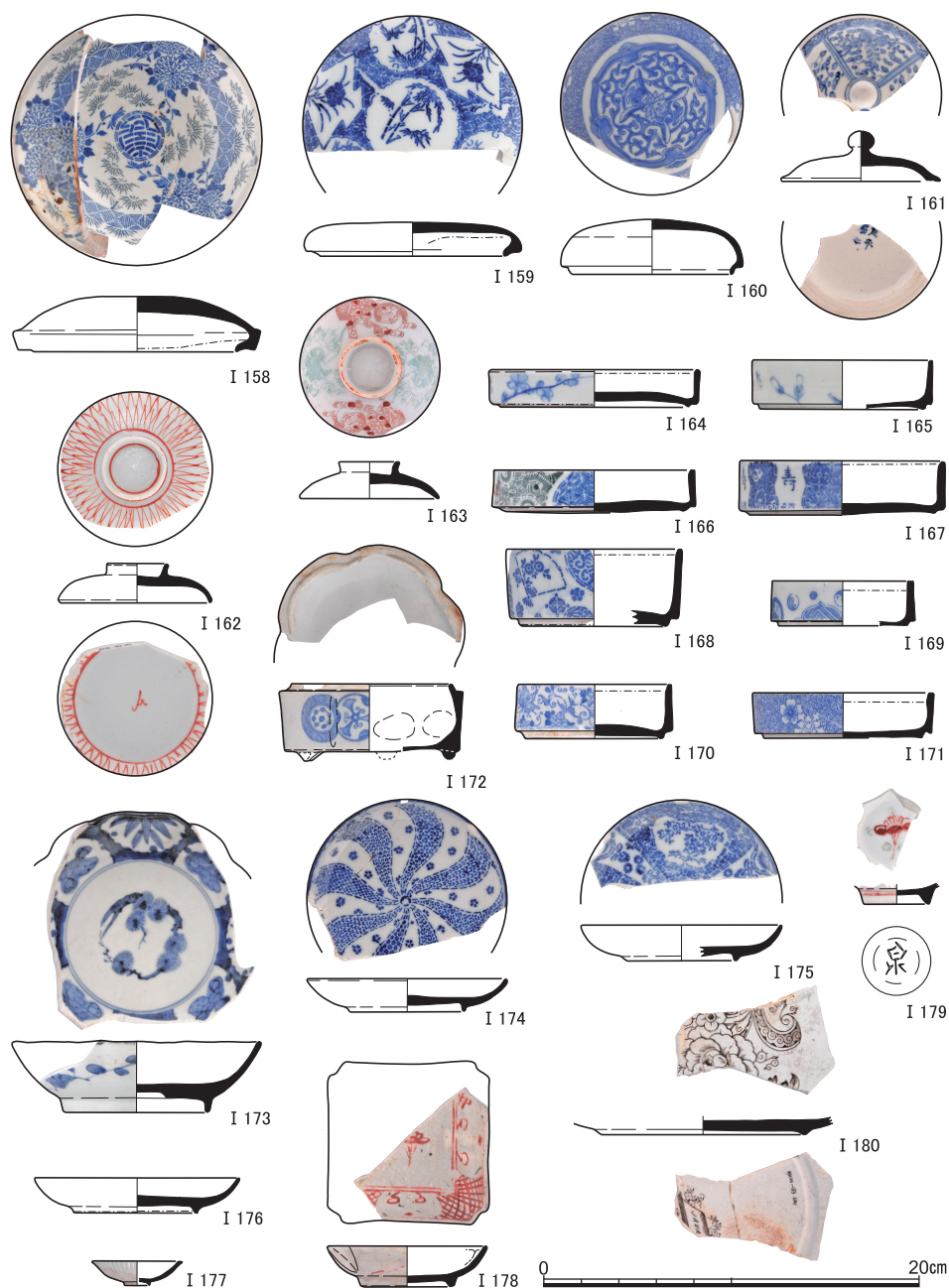


図16 SR 1 出土遺物 (6) (I 158 ~ I 180磁器)

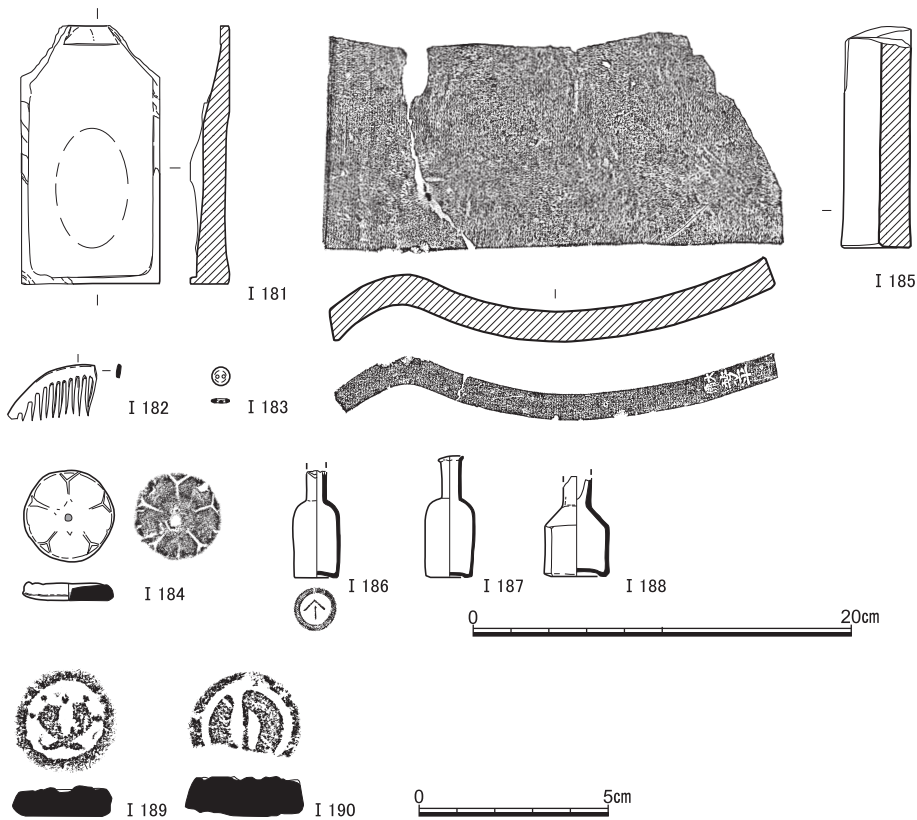


図17 SR 1出土遺物(7) (I 181石製硯, I 182櫛, I 183ボタン, I 184円盤状土製品, I 185棧瓦, I 186～I 188ガラス瓶, I 189・I 190泥メンコ)

I 181は石製の硯。I 182は木製の櫛。I 183はボタン。I 184は直径4.8cmの円盤状土製品で、上面が花卉状となり中央に径4mmの小孔があく。孔には繊維状のものが付着している。糸を紡ぐ紡錘車か。同型品が病院構内A J 15区から出土している〔富井・内記2017, 図12-I 88〕。I 185は棧瓦。頭側の端面に「大佛 芳平」の刻印がある。I 186～I 188はガラス製の小瓶。I 189・I 190は泥メンコ。

SR 1から出土した遺物には、中世の遺物や江戸時代に比定される遺物も少量含んでいるが、主体を占めているのは明治時代以降のものである。SR 1がいつ埋め立てられたのかははっきりとはしないが、1912（大正元）年の二万分の一正式地形図には描かれているのに対して、1922年の京都計画基本図を見ると、京都織物株式会社の工場が西に拡張してSR 1が廃絶していることがわかる。出土遺物の大半は、京都織物株式会社設置後の1890年ごろから1920年ごろまでのものとして位置づけることができると考えたい。

6 小 結

江戸時代以降の本地点は、近世吉田村の耕作地から幕末に設置された練兵場、京都牧畜場、そして明治23年、京都織物株式会社による本社工場の設置、京都織物株式会社の清算にともなう京都大学による敷地買収（1960年代）へと土地利用が変遷したことが史料や地図・写真などからわかっていた。鴨川至近のこの地周辺では立合調査以外に、正式な発掘調査の手が及んでいなかったため、文献上で判明している土地利用の変遷を考古学的証拠で具体的に跡づけることができるのかということが今回の調査の目的であった。

調査の結果、江戸時代の井戸や野壺、明治時代のコンクリート製道路・流路、京都織物株式会社の煉瓦基礎などの遺構とともに、江戸時代から近代にいたる遺物が多数見つかり、文献情報を補うことのできる大きな成果を得ることができた。

江戸時代では、18世紀台に編年される耕作にともなう井戸・野壺が複数見つかったことが注目される。鴨川左岸の耕地開発は寛文新堤の築造（1669～1671年）を契機に始まったと推察できるが〔千葉2022〕、たび重なる洪水で破堤し、元禄11（1698）年の改修工事では、このあたりの左岸区域では堤防が築かれなかったことが絵図から判明しており〔鈴木・山崎2021〕、ある期間、洪水の水をためる遊水地のような機能を果たしていたとも想定されている〔鈴木2020〕。一方、宝暦10（1760）年ごろ作成と考えられている絵図〔吉越ほか2007〕では、このあたりの区域にも堤防が築かれているので、それまでには左岸にも堤防工事がおこなわれ、再び安定したことがわかる。再度の堤防工事がいつおこなわれたのかは不明であるが、今回みつかった江戸時代の遺構は、18世紀台に耕地開発がおこなわれたことを示す考古学的証拠であると言いうる。

幕末の文久4（1864）年、京都守護職となった松平容保によって病院西構内の地に洋式練兵場が設置され、慶応4（1868）年には官営の操練場へと変転する。過去の調査では、AH13区で見つかった整地土〔千葉・長尾2015〕、AH12区で見つかったミニエー弾〔千葉・長尾2014、図36－I 931～I 933〕がこれに関連する遺構・遺物と考えられるが、多くの痕跡が見つまっているわけではない。今回の調査でも真南北に2列並ぶ柵状の遺構が関連する遺構の可能性を考えたが、練兵場・操練場の規模や内部構造などについてはさらなる発掘調査が必要である。

維新後の明治5（1872）年、操練場跡地に日本初の西洋式牧畜場として、京都府によって京都牧畜場が設置される。コンクリート道路とSR1西側で見つかった石垣は、京都牧

畜場の遺構の可能性が高いと考えている。のち、京都牧畜場は民間事業へと移行していたが、その敷地の北半を購入して設立されたのが京都織物株式会社であった。京都織物株式会社は渋沢栄一らの強力な支援のもと明治20（1887）年に設立が許可され、近代的な設備を用いて洋式織物を生産する会社として発展した。1946年に米軍が撮影した空中写真（国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス）をみると、東西方向に細長い工場が密集して建てられていたことがわかる。しかし戦後は低価格な製品との競争と放漫経営により、経営不振に陥り、1968年に会社解散が決議され、工場跡地は京都大学が購入することとなった〔千代間編1969〕。京都大学による土地購入後、跡地に残る建物は取り壊され大学施設へと変わっていくが、京都織物株式会社本社事務所として建立された煉瓦造2階建ての建物（明治21年着工、23年竣工）は保存され、現在は東南アジア地域研究研究所図書室本館として利用されている。2024年には、国の登録有形文化財に指定された。

試掘調査では京都織物株式会社関連の遺構は確認できなかった。大学が購入後、現存建物を除いて完全に撤去したと想定していたため、煉瓦造の基礎の確認は大きな成果となった。第4節で詳述しているように、近代日本を支えた紡織会社の工場基礎がどのように構築されていたのかを具体的に示す材料として重要な情報となった。東京の高輪築堤跡の発見・保存を契機に、近代あるいは現代の遺跡の重要性が指摘されるようになってきている〔斉藤2025など〕。京都大学構内遺跡では、早くからこうした時代の遺跡についても考古学的な調査の対象としてきたが、今後も注意を払って調査を進めていく必要がある。

なお、煉瓦基礎については、SfM-MVSによる3Dモデルを作成し、図7はその画像から作図している。測量時間の大幅な短縮という点で、3Dモデルは有効であるが、それは利用法の一部にすぎない。3Dモデルの活用については今後考えていく必要があろう。

本章は、第3節と第4節を長尾、それ以外を千葉が執筆して、両名で調整をおこなった。発掘調査は千葉と長尾が担当し、測量や資料整理で磯谷敦子、河野葵、小出来恒平、小山賢太郎の助力を得た。

3Dモデルの作成はコンピュータ・システム株式会社に依頼し、その利用法については奈良文化財研究所の山口欧志氏からご教示を得た。発掘調査の実施にあたり、ご協力いただいた施設部・関係部局・工事関係者も含めて、末尾ながらお礼申し上げたい。